

ネイチャー高知

No36 2011年1月31日発行

総会開催のお知らせ

次のとおり定例総会を開催します。併せて、講演会を開催します。講演会のテーマは、2009年から取り組んでいる皿ヶ峰（高見山）の植生と保全に関することです。年度末のご多用の時期ですが、ご参加をお願いいたします。

総会

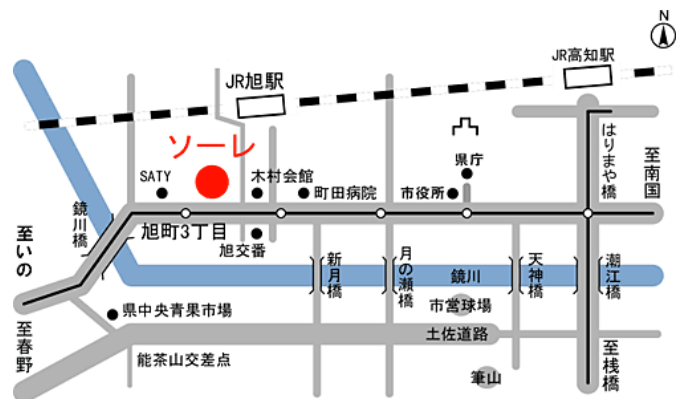
日時 2011年3月6日（日曜日） 午後3時30分から（予定：講演会終了後始めます。）
場所 高知市旭町3丁目
こうち男女共同参画センター「ソーレ」3階第1研修室
議題 2010年度事業報告・決算について
2011年度事業計画・予算について
その他

総会への出欠の返事を同封の葉書で、2月28日までをお願いします。また欠席される方は、委任状もおねがいたします。

講演会

日時 2011年3月6日（日曜日） 午後2時から3時30分
場所 高知市旭町3丁目
こうち男女共同参画センターソーレ 3階 第1研修室
講師 石川慎吾（高知大学理学部教授）
演題 高見山の植生と保全について
参加費 無料

※ 講演会は会員以外の方の聴講も自由です。お誘い合わせのうえ、ご参加ください。
※ ソーレは駐車場が狭いので、駐車できない場合があります。西300mほどのSATYさんの駐車場をご利用ください。
お買い物もよろしく・・・



蓼食う虫たち

田城 光子

今年も四万十川の河原がオレンジ色に染まった。ヤナギタデの紅葉である。仕事で京都から四万十川のほとりに移り住んだ知人が、「赤鉄橋から見えるあの景色、あれはいったいなんですか」と、少し興奮した調子で電話をかけてきた。見渡す限り上流も下流も、すごい景観になっている、という。川岸には白いサギの仲間も群れていて、たしかにまるで見事な一幅の絵画である。毎年見慣れた季節の移り変わりを、地元の人たちは特別話題にもしない。それがまた驚きだ、ともいう。

ヤナギタデはタデ科の一年草で、葉がヤナギに似ていることからそう呼ばれる。「蓼食う虫も好き好き」ということわざの蓼とはヤナギタデのことで、蓼食う虫とは辛味のある葉を好んで食べる虫があり、もの好きなものだと、他人の悪趣味をさしていったものである。しかしそんな虫たちだけに食べさせるには惜しい珍味だと、わたしは思っている。春、芽生えたばかりの小さなヤナギタデは、刺身のつまやサラダの材料になる。河原の石ころのあいだから一本一本ピンセットではさまないと採れないような小さい芽が食べ頃だ。暖かくなるとどんどん成長するので、採取のタイミングをのがしてしまう。この時期はなにかと忙しく、暇をみつけて河原にいくと大きくなりすぎていて、悔しい思いをする。スーパーに行けばきれいにパックしたものを売ってはいるが、それは栽培もので野趣に欠ける。それではまったくつまらない。鮎の塩焼きに付けて食べる蓼酢は、鮎好きの人なら誰でも知っているだろう。鮎のいるような川には、たいてい河原にヤナギタデが生えているので、鮎釣りのついでに手にいれることができる。ヤナギタデの葉っぱをすり鉢でよくすり、酢を加えれば出来る。料理屋さんなどでは色や味をよくするために、緑の鮮やかな野菜や調味料なども入れることがあるそうだが、わたしは鮎をほとんど食べないので、こころあたりのことは良く解らない。秋。



赤鉄橋から見たヤナギタデの紅葉の様子 (2010.11.23)

花が咲き紅葉する前に全草を刈りとり、天日乾燥してお茶にした事がある。口に含み呑みこんですぐは何事もなかった。2〜3呼吸おいて、口の中がひりひりと熱くなり、やがて体中がほてりはじめた。最後には頭もくらくらしめまいを感じた。なかなか刺激的な飲み物ではあった。葉を粉にして寿司飯に混ぜ、蓼寿司を作る地方があると聞く。ヤナギタデには消臭や殺菌効果があるというから、冷蔵庫など無かった時代に、野良仕事の弁当などを長持ちさせるための工夫として使われたのが始まりだろう。

ヤナギタデによく似た、ポントクタデ、と言うのがある。こちらは早くから茎が鮮やかな赤をしている。柱頭の数や種子の形が区別点ではあるが、最も簡単な見分け方は、葉に辛味があるかどうかだ。野外でいつも葉を一枚かじりながら「これはヤナギ、こっちはポントク」と同定するのだが、仲間の表情を見ていれば結果は一目瞭然。ちなみにポントクタデは辛味がなく、間が抜けている、というのがその名の由来だそうだ。

広大な河畔林の中は河原の草紅葉とは対照的に、春の野草が一面緑の絨毯を敷いていた。気の早い菜の花も、やわらかい葉を広げている。思いがけず季節外れのカキドオシの Pasta や、ウシハコベの胡麻和えなどを食卓に並べて小春日和を楽しんだ。河川敷の、子供の頃コンペイトウと呼んでままごと遊びをしたミソソバは、今見ても美味しいお菓子のようだし、イヌタデも甘いおこわを盛ったように咲いている。ママコノシリヌグイのトゲはちょっと怖いけど、イシミカワの襟巻のような托葉には愛きょうがあって青い大きな果実にも見ごたえがある。今年は、わたしがまだ名前を知らないヌカボタデのようなはかない花をまばらにつけた小型のタデが、一面に咲いた。さまざまな花が競うように咲き、紅葉していく。勢力ではヤナギタデにはとうていかなわないし間も抜けてはいようが、この多様性がたまらなく良い。気温が下がるごとに河原は色彩を変え、まもなく四万十川ではカワウやミサゴと川漁師のあいだで、落ちアユの争奪戦が始まる。

野山での拾いもの

モミジバフウとプラタナスの果実

坂本 彰

表題は「野山での拾いもの」であるが、今回は野山でなくて市街地での拾いもの、更に正確に言うと、プラタナスの果実は、わざわざ落として拾ったものである。

まずモミジバフウ（アメリカフウ）だが、自宅近くの国道、通称土佐道路や幹線市道に街路樹として植えられている。夏は木陰をつくり、晩秋には見事な紅葉で目を楽しませてくれていた。ところが昨年8月、このモミジバフウにアメリカシロヒトリが大発生してしまった。高知新聞でも大きく取り上げら



上がプラタナス 下がモミジバフウ

れたのでご覧になった方もおられると思うが、昆虫を専門にしている方の間でも「久しぶりの大発生」という凄まじいものであった。アメリカシロヒトリのことについては、観察していて面白いことがあったので、別に紹介する機会を持ちたいと考えている。話を戻すが、アメリカシロヒトリの被害に対して、国道を管理する国土交通省は、その後の発生を防ごうと、巢を枝・葉ごと取り払ったので、せっかくの街路樹が夏の盛りに丸坊主状態になってしまった。おかげで、昨年の秋は、紅葉も楽しめなかったし、果実も採集できなかった。市道の方は、予算がないのか無頓着なのか、アメリカシロヒトリのなすがままに放置していたが、紅葉の時期に乱暴な剪定をしてしまい、こちらでも果実を採集できなかった。話が前後するが、果実は牧野植物園で行っている「子ども体験教室」のモビール造りの材料として、目をつけていた物である。

次に、プラタナスであるが、モミジバフウの果実に似たようなものがないか、探していると南奉公人町の公園で、同じように枝にぶら下がっているのに行きあたった。果実が落ちていないか探したが全くない。それではと、自宅から、標本採集用に購入していた高枝切り用の鎌を持ち出して果柄を切ろうとしたが、頑丈でなかなか切れない。やっと切り落としてみると、果実と枝は堅い繊維状の果柄で結ばれており、これだと風が吹いても落ちないはずだと納得した。図鑑で調べると「プラタナス」と呼ばれている樹木には、バルカン半島からヒマラヤを原産地とするスズカケノキ、北アメリカ東部を原産地とするアメリカスズカケノキ、その両種の交配種とされるモミジバスズカケノキの3種があり、日本ではそのいずれもが街路樹として植えられているとのことである。では、この南奉公人町公園にあるプラタナスはどれに当てはまるだろうかと調べてみると、何とも判断に迷ってしまった。

日本の野生植物木本編（平凡社）によれば、スズカケノキ属の検索表（果実の分のみ）は次のとおりとなっている。

集合果は繖状に3-7個つく・・・・・・・・・・・・・・・・スズカケノキ

集合果は1（2）個つき、瘦果の先はくちばしがなく、丸い・・・・アメリカスズカケノキ

集合果は2-（3）個つき、瘦果の先はくちばし状・・・・・・・・モミジバスズカケノキ

南奉公人町公園の果実（集合果）は、集合果が1又は2個（ほとんどが1個であるが、2個のものもある）つき、瘦果の先はくちばし状に細長く尖っている。集合果の状態からだとアメリカスズカケノキ、種子の形からだとスズカケノキ又はモミジバスズカケノキとなり、葉の形や毛の有

無を見ないと判断がつかない。種の同定は、夏になって葉が開いてからのお預けになった。

モミジバフウとプラタナスの果実は、両方ともたくさんの種子が球状に集まった集合果で、遠目には似ているが、手に取ってみると、一つ一つの種子（種子の入れ物）は大きな違いがあった。モミジバフウは、片方の先端が細長く尖った鳥のくちばし状の細長い楕円体の種子の入れ物がたくさん集まっており、その中にカエデの仲間のような翼がついた種子が収まっている。プラタナスの種子は、長さ 12mmほどの細長い倒卵形で、基部に白い毛があり、それがコルクのような芯にびっしりひつついた構造になっている。先にも書いたように、部屋飾りのモビールの材料として使えないかと思って採取したのであるが、これほどたくさんの種子がバラバラになって部屋の中に散乱すると、部屋飾りどころかゴミ発生器になってしまう。（モミジバフウの方も多くの種子が殻から出てくるが、あらかじめ種子を出しておけば殻の方は残るので材料に使う事が出来る。）



ところでスズカケノキの名前の由来であるが、読んだか教えていただいたか定かでないが、「果実（集合果）の形を山伏が首にかけている鈴懸けに見立てたもの」というふうに理解していた。今回、この文章を書くにあたって、山伏の装束を改めて調べてみたら「鈴懸け」は写真2のような法衣で、ふさふさした玉のようなものは「結袈裟（ゆいげさ）」につけられた「フサ」（写真3）である事が判った。気になったので、よく植物名の由来を書いている牧野植物図鑑を当たってみると「鈴懸の木の意味で、その球状果が花軸に連なって垂れる様子を山伏の首にかける装飾になぞらえていうに基づく」とあった。この書きぶりでは、「山伏の首にかける装飾を鈴懸けという」とは言っていないが、文意からは山伏の首にかけるのを鈴懸けといい、それになぞらえて「鈴懸の木」という名前がついたと読める。



実際いくつか当たった図鑑の中にはそのように書いてある本もあったので、誤解していたのは私だけでなく、これを読んでおられる方の中にもおいでと思う。

プラタナスにスズカケノキという和名を与えたのはどなたか判らないが、「山伏装束説」だと命名者は山伏の装束にあまり理解をされていなかったということになる。あるいは、上村昇著「なんじゃもんじゃ」にあるように、「これは実の形が鈴をかけたようだ」という単純な意味であるらしい」というのが正しいのかもしれない。

鈴懸(すずかけ) 写真2

修験道の入峰修行の法衣。鈴の字は五鈷鈴を、懸は金胎の曼荼羅をかけて修行することを表す

結袈裟（ゆいげさ） 写真3

修験道専用のお袈裟で九条袈裟という袈裟を折りたたんだもの六つのフサは六波羅蜜を表す(フサは前に4個、背中側に2個ついている。)

※ 写真2、写真3、山伏の装束に関する資料は、本山修験宗駒場山愛敬院のホームページ

(<http://www.d6.dion.ne.jp/~zenkou/index.htm>) から転載させていただきました。

行事案内

スミシと早春の花観察会

日時 2011年3月21日(月曜日・春分の日)

午後1時30分から

場所 高知市鏡 鏡ダム周辺の雑木林

1時30分に高知市鏡 川口橋北詰集合

継続して観察会を開催している場所です。スミシの仲間以外にもたくさんの春の花を観察できます。

講師 細川公子さん(当会副会長)

持ってくる物 筆記用具 あれば図鑑

仁淀川シンポジウム

日時 2011年2月6日(日) 13:00~17:00

場所 高知県の町 かんぼの宿 (吾川郡いの町波川 1569)

内容 たかはし河川生物調査事務所高橋勇夫氏の基調講演、プロジェクトの結果発表など

参加費 無料 (要申込)

申込み によど自然素材等活用研究会 Fax: 0889-34-6065 Mail:

inoue.ke@tulip.ocn.ne.jp

【問合せ先】 Tel: 090-8696-7707 によど自然素材等活用研究会 井上

「ネイチャー高知」の原稿を募集します

「ネイチャー高知」は、高知県自然観察指導員連絡会の機関紙として、1月、7月の年2回発行しています。自然保護に関する主張やエッセイ、フィールドの紹介など何でも結構ですので、どしどし投稿ください。

「ネイチャー高知」高知県自然観察指導員連絡会会報

NO 36

事務局 780-8075 高知市朝倉南町3-51-1 坂本彰 方

TEL&FAX 088-850-0102

E-Mail akira@baobab.or.jp